

# 夕顔

世阿弥作

季は	地は	後	前
秋	京都	ワキ シテ 夕顔の上	ワキ シテ 豊後の僧 里女

「是は豊後の国より出でたる僧にて候。さても松浦箱崎の誓ひも勝れたるとは申せども。なほも名高き男山に参らんと思ひ。此程都に上りて候。今日も又立ち出で仏閣に参らばやと思ひ候。」

サシ  
「尋ね見る都に近き名所は。まづ名も高く聞えける。」

雲の林の夕日影。うつろふ方は秋草の。花紫の野を分けて。」

歌  
「賀茂の御社伏し拝み。く。糺の森も打ち過ぎて。」

帰る宿りは在原の。月やあらぬとかこちける。五  
条あたりのあばら屋の。主も知らぬ所まで。尋ね  
訪ひてぞ暮らしける。く。」

「急ぎ候ふ程に。是は早五条あたりにて有りげに候。  
不思議やなあの屋づまより。女の歌を吟ずる声の  
聞え候。暫く相待ち尋ねばやと思ひ候。」

シテ  
「山の端の心も知らず行く月は。うはの空にて影や  
絶えなん。巫山の雲は忽に。阳台のもとに消えや

すぐ。湘江の雨はしばくも。楚畔の竹を染むるとかや。

サシ「こゝは又もとより所も名を得たる。ふるき軒端の忍草。しのぶかたぐ多き宿を。紫式部が筆の跡に。たゞ何某の院とばかり。書き置きし世は隔たれど。見しも聞きしも執心の。色をも香をも捨てざりし。

下歌「涙の雨は後の世の。さはりとなれば今も猶。

上歌「つれなくも。通ふ心の浮雲を。く。はらふ嵐の風の間に。真如の月も晴れよとぞ。空しき空に仰ぐなる。く。

ワキ詞

「如何に是なる女性に尋ね申すべき事の候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「さてこゝをば何くと申し候ふぞ。

シテ

「是こそ何某の院にて候へ。

ワキ

「不思議やな何某の山何某の寺は。名の上の唯かり

そめの言の葉やらん。又それを其名に定めしやらん承りたくこそ候へ。

シテ

「さればこそ初めより。むつかしげなる旅人と見えたれ。紫式部が筆の跡に。唯何某の院とかきて。其名をさだかにあらはさず。然れどもこゝは旧りにし融の大臣。住み給ひにし所なるを。其世をへだてゝ光君。また夕顔の露の世に。上なき思ひを見給ひし。名も恐ろしき鬼の形。それもさながら苔むせる。河原の院と御覽ぜよ。

ワキ

「うれしやさては昔より。名におふ所を見る事よ。我等も豊後の國の者。其玉葛のゆかりとも。なして今又夕顔の。露きえ給ひし世語を。かたり給へや御跡を。及びなき身も弔はん。

「そもそもく光る源氏の物語。言葉幽艶をもとゝして。

シテクリ

理浅きに似たりといへども。

地「心菩提心をすゝめて義ことに深し。誰かは仮にも

語り伝へん。

「中にも此夕顔の巻は。殊にすぐれてあはれなる。

地 「情の道も浅からず。契り給ひし六条の。御息所に  
通ひ給ふ。よすがによりし中宿に。

シテ 「唯やすらひの玉鉾の。

地 「便りに立てし御車なり。

クセ 「ものゝあやめも見ぬあたりの。小家がちなる軒の  
つまに。咲きかゝりたる花の名も。えならず見え

し夕顔の。をり過さじとあだ人の。心の色は白露  
の。情おきける言の葉の。末をあはれと尋ね見し。

閨の扇の色異に。たがひに秋の契りとは。なさゞ  
りし東雲の。道の迷ひの言の葉も。此世はかくば  
かり。はかなかりける蜉蝣の。命懸けたる程もな  
く。秋の日やすく暮れはてゝ。宵の間過ぐる故郷  
の。松のひゞきも恐ろしく。

シテ 「風にまたゝく灯火の。

地

「消ゆると思ふ心地して。あたりを見ればうば玉の。

闇の現の人もなく。如何にせんとか思河。うたか

た人は息消えて。帰らぬ水の泡とのみ。散りはて

し夕顔の。花は再び咲かぬやと。夢に来りて申す  
とて。有りつる女も。かき消すやうに失せにけり。

く。

（中入）

ワキ歌  
「いざさらば夜もすがら。く。月見がてらに明か  
しつゝ。法華読誦の声たえず。弔ふ法ぞ誠なる。

く。

後ジテサシ

「さなきだに女は五障の罪ふかきに。聞くも氣疎き  
もののけの。人うしなひし有様を。あらはす今の  
夢人の。跡よく弔ひ給へとよ。

ロシギ

「不思議やさては宵の間の。山の端出でし月影の。  
ほの見えそめし夕顔の。末葉の露の消えやすき。  
本のしづくの世語を。かけて顕はし給へるか。

シテ  
「見給へこゝもおのづから。氣疎き秋の野らとなり

て。

ワキ 「池は水草に埋もれて。古りたる松の陰暗く。

シテ 「又鳴き騒ぐ鳥の枯声。身にしみわたるをりから  
を。

ワキ 「さも物すごく思ひ給ひし。

シテ 「心の水は濁江に。ひかれてかかる身となれども。

優婆塞が行ふ道をしるべにて。

地 「来ん世も深き契り絶えすな。契り絶えすな。(序の舞)

シテ 「御僧の今の弔ひを受けて。

地 「御僧の今の弔ひを受けて。かずくうれしやと。

シテ 「夕顔のゑみの眉。

地 「開くる法華の。

シテ 「花房も。

地 「变成男子の願ひのまゝに。解脱の衣の袖ながら。

今宵は何を包まんと。言ふかと思へば音羽山。嶺  
の松風かよひ来て。明けわたる横雲の。迷ひもな

しや東雲の。道より法に出づるぞと。明けぐれの  
空かけて。雲のまぎれに失せにけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈第七輯」大和田建樹著